

葡萄牙國滞在記

1998年の7月から10ヶ月間、学振の身分でポルトガルはリスボンの Instituto Superior Tecnico に滞在しました。そこで行った昇華熱測定に関しては研究紹介の方を参照していただくとして、ここでは滞在の印象など語ってみたいと思います。

西欧の大航海時代を通して「葡萄牙」は日本と最も古くから直接交渉のあった国であることは周知のことだと思います。それはパン・シャボン・カステラ・カルタ・天ぷらなどの殆ど日本語化してしまった多くの単語に端的に表されています。しかしこの国のその後の、特に近現代史については意外と知られていないようです。私もこの国がその後永らくスペイン支配下になったことは知りませんでした。また今世紀に入ってからスペインのフランコ独裁政権を彷彿とさせるサラザールによる警察国家体制が二度の世界大戦を挟み、そしてそれらに直接関わることなく1970年頃まで続きました。今話題の東チモールがインドネシアに併合されたのは宗主国ポルトガルの独裁体制崩壊後の混乱にインドネシアが乗じた面があります。そして1974年の無血民主革命とその関連の日を人々は大変誇りにしています。このような経緯からこの国はまずは古びて質素な（スペインほど絢爛ではない）古都の印象を観光客に与えながら、長く観察すると政治・大衆文化などにある意味で若いという面も見られます。研究所にしてもそうで、私の使っていた装置が置かれている建物は築100年近く経っておりそれに匹敵しそうなほど古いガラス器具などがある一方でスタッフは全般的に若く、多くの研究プロジェクトが始めたばかりの活発且つ自由な状況にあるように見えました。学術を振興しようという政府の意図もあるのか資金面でも割と潤沢のように見え、資金難で逼迫しているロシア・東欧から多くの研究者を受け入れていました。私もラテン的気さくな雰囲気の中で装置を立ち上げることから始めることによって多くのことを学ぶことができたことを嬉しく思っています。置いてきた装置が改良を重ねながら彼らに使われ続ければなお嬉しい。

旅行記・滞在記の類が須くその著者の独断偏見記であることは宿命です。上に記したことは私の僅か10ヶ月の間の、しかも限られた地域と人々との接触で得られたものにすぎません。上でも使ってしまった「ラテン的」とか言う言葉はその典型でしょう。この滞在記がポルトガルに対するステレオタイプを提供する虞なしとしません。が、統計的に十分な試行の結果、これだけは帰納できそうです。乃ち、「葡萄牙」と書かれるだけあってここのタンニン分多めで力強い味わいの赤葡萄酒はイケます！（但しマテウスはいまいちです）日本ではこのマテウス以外なかなかお目にかかれませんが是非一度お試しあれ。

（清林 哲 識）